
時空蟹

cokoly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空蟹

【著者名】

cokoly

【ZPDF】

N8057F

【あらすじ】

泡を吹く蟹を見て、『僕』は過去に思いを馳せる。幼い頃に出会いつた一匹の蟹。『僕』はそれを拾つて彼女とともに束の間の休日を過ごす。

蟹が泡を吹いていた。

僕はその泡を指先で掬つた。

蟹は不思議と逃げなかつた。

砂にほんの少し沈み込んだ爪先に少し力を加えて、僕は立ち上がつた。

指先に付いた泡はすぐにぷつぷつと弾けて、薄い液体を僕の指先に残した。

蟹はまだそこに居た。

まるで僕を見上げているみたいだつた。

僕は意識は遠い過去の記憶の抽き出しから、小学校のプールの情景を取り出した。

プールサイドに蟹が居たのだ。

場にそぐわない小さな闖入者を見つけて、落ち着きのない何人の生徒がやいやいと周りに集まつていた。

一人がその蟹を突つついて笑う。

女の子が「やめなよ」と言う。

蟹がつくつくと足を動かして移動を始める。

僕はその進行方向を塞ぐような場所に手を置いた。

蟹はそこで、はた、と止まり、そこでやはり僕を見上げる格好になつた。

始業のベルが鳴り、先生がみんなに声をかける。

僕は蟹と目を合わせたまま動けなかつた。

僕は蟹の進路を塞いでいた手をプールサイドのコンクリートのタ

イルから浮かせ、蟹を自由にした。

それでも蟹は動かなかつた。

後ろから近づいてきた先生が僕の頭をゴツンと叩き、僕は耳を引

つ張られてクラスのみんなの列に混じった。

遠目に、蟹がつくづくとした歩みでどこかへいくのが見えた。

砂浜で僕と対峙した蟹は、あの時の蟹ではないかと、僕はそんなことを思った。

もちろんそんな訳はなく、あの時の蟹はもつ寿命を迎えて死んでいて、しかも故郷から遠く離れたこの場所に居る蟹が、あの蟹であるはずは、到底なかつた。

それでも僕は、あの時の蟹が時空を超えて僕の中の過去と現在を結びつけたのだと思った。

何のために？

そう聞かれても、答えようがない。

何かの意味があるようにも思えない。

ただ、あの時の蟹が、理由はともかく時空を超えて、再び僕の顔を見に来てくれたのだ、と僕はむりやり理解した。

僕は近くに転がっていた口の広い空き瓶を拾つて中を海水で濯ぎ、そこに蟹を捕まえて入れた。

蟹はしばらく所在なげに足をむずむずと動かしていたものの、しばらくするとおとなしくなって、ガラスに映る歪曲された世界を興味深く眺めているように見えた。

僕はその瓶を片手に持つたまま、近くに住むカスミの家に向かつた。

「蟹を拾つたんだ」

僕はカスミにそう言つて蟹の入つた瓶を見せた。

蟹はまたふくふくと泡を吹いた。

彼女はそれを見てきやはははと笑つた。

「暇だねえ」

カスミは僕に田を向けてそう言ったが、それでも瓶を突ついて蟹がぴくりと反応するのを楽しんでいた。

小さな生き物には何でも反応する彼女が喜ぶことは分かっていた。思つていた通り、彼女の子供のまま好奇心を宿した田を見て、僕は自分の心が和んでいくのを自覚する。

「なんだか懐かしい気がしてさ」

それは事実だったが、僕はあるでいい訳のようにそう言った。「一人で砂浜歩いてないで、先にうちに来てから一緒にいけばいいのに」

カスミはそう言った。

「いや、なんとなぐさ」

一人で歩きたかったんだ、とは言わなかつた。

カスミと歩くのが嫌な訳ではない。

ただ、一人になつて海を眺めながら歩きたかったのだ。

「その蟹、昔見た気がするんだ」

「へえ、どこで？」

「小学校の頃、学校のプールで」

「……ずいぶん昔だね」

「うん。 そなんなんだ。 不思議だろ？」

「不思議なのは君の方だよ……」

「でも、本当に似てるんだよ。あの時の蟹と」

僕は先ほど思い出した記憶のシーンをカスミに説明して聞かせた。

「他の人は蟹なんてどれ見ても同じだつて思うかもしれないけどさ」「そんなことないよ。 どんな小さな生き物でも、ほ乳類でも昆虫でも、みんな違う顔してるよ。 それは、小動物フェチのあたしが保証する」

「うん。だから、カスミならそれが分かつてくれると思つて」「ふうん」

カスミはそう唸ると、妙に得意そうな顔つきをした。

「窓際に置いたら、干涸びちゃうかな」

カスミはそう言いながら蟹の入った瓶を南向きの窓際に置いた。太陽は熱い熱量を含んだ光を室内に投げ込んでいて、おそらくカスミの言う通りになってしまっただろうと思えた。

「少し、水を入れたらいいんじゃないかな」

僕はそう言った。

「そうだね。そうしよ」

カスミは小動物好きではあつたけれど、特に甲殻類の生体に詳しいと言う訳でもなかつたし、その点においては僕と大差なかつたので、どこか半信半疑のまま台所について瓶の中に少しだけ水を入れた。

窓際に戻された蟹は、また泡を吹いた。さつきまでより泡の量が多いように見えた。

僕らはしばらくそのまま蟹を眺め続け、時おり口づけをかわした。しかし窓から差し込んでくる光の熱さに肌が焼けてくるのを感じると、僕はやはり蟹のことが心配になつた。

「やつぱり海に戻そ」

僕がそう言つと、カスミは賛成した。

僕はカスミと一緒に砂浜に戻つた。

なるべく波打ち際に近づいて蟹を瓶の中から出すと、蟹は一目散、と言つ風にまっすぐに海に向かつて横歩きを始めた。

「やつぱり熱かったんだね」

カスミは言つた。

「またあいつに会えるかな」

波間に消えていく蟹を見送りながら、僕はそう言つた。

「多分、こんどはおじいちゃんになつた頃に現れるんじゃない？」

「もうぼけちゃつて覚えてないかもな」

僕はカスミが何か軽口を叩いて答えてくると思っていたのだけれど、予想に反して、彼女は僕の方にこつんと頭を寄せてきた。

彼女は何も言わなかつた。

「どうしたの」

と僕が聞くと、

「こんな時間がずっと続けばいいなあと思ったの」とカスミは答えた。

「また暇を作るよ

僕はそう答えて、完全に見えなくなつた蟹が泳いでいるはずの水面を眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8057f/>

時空蟹

2010年10月8日15時27分発行